

Title	富永謙齋先生傳考補
Author(s)	石濱, 純太郎
Citation	懷徳. 1935, 13, p. 37-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88929
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

富永謙齋先生傳考補

石濱純太郎

富永謙齋先生の傳記は、之を先にしては西村碩園先生の「懷德堂考」大正十四年大阪刊あり、之を後にしては稻束猛・吉田銳雄兩先生の「池田人物誌」大正十一年三月池田刊があつて、探索考證は精審を極めて行つた。余も亦先輩の所説に根據し、補ふに知友の所見を以てして、今年關西大學々報第三百十號に小傳を掲げたが、何分勿々の撰に成り、譌誤を免れ得なかつたし、又考證に粗なる所もあつたから、再びこゝに諸先生の傳文を補正し得べき點を考へて、博雅の示教を得たいと思ふ。

富永家の祖先が何處の出であるかは證すべきものはない。碩園先生が「其の先は河内道明寺よりや出でけん」と云はれたのは、道明寺屋の稱號よりの推想に過ぎない。内藤湖南先生大阪毎日新聞社大正十四年大阪刊が「ヒヨットすると播州から出たのではないか」と云はれたのは、「翁の文」の第三序文が賀古伴禮玄幹撰と題してあるので、賀古を加古川に關聯せしめて推考せられたに過ぎない。この伴禮玄幹は謙齋先生の假名であらうとは其文を一讀すれば想到し得るが、玄幹が德基又は仲基と通ずと思はれる事からも證せられる。只署名の側に在る上の印に「伯氏」とあるのが少し疑問となる。まさか兄の毅

齋でなからう。そうすれば生母安村氏の長男とでも解すべきか。そこで此文を謙齋先生とすれば、賀古は出自の地名と見なして考へるも一説だが、或は住所の雅名と見るも一説と云へようが、未だ之を認定し得ない。兎に角何れにしても、富永家の出自の地は未だ疑問たるを免れない。謙齋先生の祖父の墓は下寺町四丁目の西照寺に存するから、祖父の頃から大阪の人たるは明かである。

謙齋先生に關して「東雅」に載する小傳を參考し得たるは余の誇りとする所である。「東雅」は謙齋先生の弟蘭阜の子李谿が編したる詩選で、「池田人物誌」下卷の荒木李谿の條下に詳しい。余の見たるものは同書に未見とせられたる萩の茶屋故大田蘆陰氏舊藏本、今は令弟信三氏の秘藏せらるゝものである。頼春水・中井竹山などの校語を有せるものであるから、李谿が竹山に送り春水が持歸りたる原本に相違ない。この珍書には著録されたる詩の作者の小傳が末尾に掲載されてゐて、その中に謙齋先生の傳が存する。編者が先生の甥李谿であるから、餘人の傳は措いて先生の傳こそは確實信すべきに相違ない。下に先生の傳を考補し得たるも一に之に依るからである。今その全文を移録して後の參考に資する。

謙齋 書於野園五言四句

謙齋富永基字仲子阪府人少穎悟博涉

群籍事母逃于府下陋巷授徒撰述尤多

人以比賈誼嘗夢誼自齋紙筆來貽已

卒年三十二文崇周漢詩宗王孟此篇真

趣高雅如出於惘川鹿門中父德通字芳

春以善國字聞弟定堅字子剛重字

子黎皆樂文雅以自終

この傳に注意して示教せられ、且つ玉樹蘆城君と共に親しく拜觀するを許容されたる大田信三氏には衷心より感謝の意を表する。

謙齋先生が父芳春の第三子である事は確定してゐる。蘭臯處士鷄肋集池田叢書第二篇、大正十二年池田刊の田中桐江の

序に蘭臯を「浪華芳春翁第四子」とし、蘭臯の弟富永東華は墓碑浪華叢書第十本村篤處先生篇稿、本大阪訪碑錄、昭和四年大阪刊には「富永芳

春君第五子」としてあるから、謙齋先生が第三子であるは疑ふを得ない。従つて湖南先生が「翁の文」

の跋先生家刊景印本に於て三郎兵衛を以て謙齋先生の通稱と斷せられたるは固り易ふべくもない。たゞ謙齋先

生の異母兄の一人が分明してゐない。然らば荒木氏の追遠名簿中に存すると云ふ「延享元年八月二十

日 忠隆通稱左門」を以て之に比定すべきかと思ふ。

謙齋先生の字は「東雅」では仲子であるが、全機居士の「翁の文」の序、及び恐らく「大東昭代詩

紀」にも子仲とあり、共に信すべき資料だから取捨し得べくもない。最も後のものと云ふ點からは「東

「雅」が誤り倒したとも云へよう。或は先生自ら子仲とも仲子とも云つたかも知れない。全機居士とは落款の印から見ると橘雖、字子和であるから、謙齋先生の詩吉田銳雄先生輯謙齋遺稿の稿本によるにある「芳野歌送橘子伯」「和橘伯雄寄妓之作」の橘氏に相違ない。因に、「翁の文」の第一序は師良と云ふ人が書いてゐるが、此人こそは、他人に依傍する事少き「出定後語」中にも特に其説を引用衍述せられたる林師良に違ひない。卷之下禪家相承第二十の末尾に謙齋先生自から注して云ふ、「林氏中甫、名師良、先子之友也、今現在」と。この橘・林の兩氏は懷德堂定約附記懷德第十號附録の連名中の橘屋富四郎・林新次郎の家に關係はないものだらうか。

謙齋先生が家を出て黃檗山大藏經校合の役に服するに至つた家庭内の事情は、湖南先生の云はれる通り生母が兄毅齋には繼母であつたに起因するであらう。「東雅」の傳に「事母逃于府下」云々であるからには、父芳春歿後は母と共に分家したらしく、父存生中から早く面白からぬ事情を生じてゐたものと見ゆる。

「東雅」の傳の「陋巷授徒」は家塾を開いて教授した事であるが、何處であつたらうか。「翁の文」の林氏の序に「過しころ伊賀須利のみやの邊に翁ありけり」と云ひ、「所も渡邊の翁の文なれば」とあつて、此翁は謙齋先生に外ならないからとて、座摩神社附近に住したらうと推察するのも固り無理ではない。

所が玉樹蘆城君は書籍業組合に在る所の「自享保九年八月迄圖書板木目錄」の「出定後語」の所に

寛政十二年四月迄

延享元年子十一月免許

コノ上ニ紙ヘリ「著述作者」トアリ
備後町五丁目 富永 仲基

コノ分京へ賣渡
南久寶寺町五丁目 丹波屋理兵衛

と記されてゐるに注意して、備後町五丁目に住したもので、今の備後町三丁目綿業會館の所であらうと云ふ。これは當時の記録の事であるから、信にして徴あるわけである。只座摩神社附近と備後町とは二ヶ所なりや、一ヶ所なりやは断定し難い。林氏の序も「延享改元神奈月の頃」に書いたものであり、備後町も座摩神社附近と云へない事もないからである。

因に、同目録の書入れの「コノ分京へ賣渡」も出定後語に享和二年の城戸市右衛門林安五郎本、文昌堂永田調兵衛本、二書堂の合赤俵々本等の京都本があるによつて證せられる。こゝで問題と思はれるのは文化二年の大阪松村文海堂本と、平田篤胤の出定笑語に記されたる、大阪の何とかいふ本屋がその夏土藏の掃除に板木を探し出し早速すり出し新たにつゝみ紙へ詳しく其因縁を記したと云ふ本とである。これ等が享和のゑびす屋本との關係はどうなるのであらう。余は篤胤の云ふ包紙有る本を見たいと切望するものである。序で乍ら賀茂季鷹の「雁の行かひ」の奥付はゑびすや本の奥付と全然同じものであるのも注意する要あらう。

尙ほ同目録の「翁の文」の所には

延享二年丑九月 富士屋長兵衛

當時出板元不相分
コ、ニ紙ハリ「作者」トアリ

とあるそうで何も手掛りはない。「出定後語」出板後僅かの間であるに關らず相分らずはおかしい。然し勝手な穿鑿はよして置かう。

謙齋先生の享年は「東雅の」小傳によつて三十二歳と分明になつた。引いて歿年も斷定し得る。第一に、碩園先生が「出定後語」の延享元年自序の語「甚也今既三十以長」によつて、延享元年二十歳、正徳五年生れと斷せられたるは信じて誤なかるべきものだから、延享三年が三十二歳の歿年となる。第二に、先生の遺詩に「早春偶成丙寅歲作」がある、蘭阜の「鷄肋集」の先生の序は延享三年春三月であり、「翁の文」の自序と思はる、第三序には「惟三年春三月郷人將論撰知叟之言」耀明之天下以爲斯文之紀也、令予有言」とあるから、三年の春は生存で春以後に逝世された事となる。三年春以後に資料を闕くのも旁證にはなる。第三に、蘭阜の五律「哭謙齋兄」の詩は必ず謙齋先生長逝後餘り遠からざる同年冬の作と見て、その結句に「凄然風雪夜　姜被淚痕斑」とあり、又七古の「暮春某日憶亡兄」の詩は翌年四年三月の作と見て、その末の方に「別來秋去春將季」の句があるから、恐らく夏は病に伏して、秋に歿したと見てよからう。池田人物誌では蘭阜の明和三年日本春秋序の文に「憶昔二十年前、家兄謙齋唱道浪華、一時嚮風」とあるから、逆算して延享四年は生存と見たが、此序の文句は概數を擧げたとして差支無い。乃ち歿時を以て延享三年秋と爲さうとするものである。

次に墓は富永一家の墓所西照寺では見當らない。只一家の墓の直く左側に西華先生と云ふ人の小さい墓がある。これは一家中の墓とも見られる。この西華先生は謙齋先生では無からうか。別に此説を主張する程の所據を有するのではないが、謙齋先生の末弟眞重は東華と號し、墓所も生野國分町の國分寺に在るので、東華華の先生と浪華の先生と對照して見たらどうかと思ふのである。東華の碑文に幼にして仲兄謙齋先生に従ひて學ぶとあるから、先生に従つて分家してゐたものだらう。井狩雪溪の「復謙齋富公書」謙齋遺稿附錄の副啓の中に「況賢季妙齡俊秀、亦巧屬文辭、有老成之風、其立論也、出於時俗之表」とあるから、兄先生教育の下に早くから世に知られてゐたらしい。そこで謙齋先生自らは或は西華と號しなかつたとしても、西華先生と呼稱せられてゐたので、弟眞重が東華居士とか東華外史と稱するに至つたのではなからうか。只臆定の想像に過ぎないが、この機會に一言した事を許されたい。因に數年前、吾友島本一男君は國分寺の墓地に東華父子の墓を訪ねたが、荒廢して湮滅の恐れある由を余に語つた。有志の士は謙齋先生の愛弟一家の事をも記せよ。幸ひ碑文は皆木村篤處翁の「大阪訪碑錄」に著録されてゐる。

謙齋先生は「東雅」には撰述尤も多しとあり、蘭臯の日本春秋序には道を浪華に唱へ一時風に嚮ふとあるに關らず、今傳ふる所僅に「出定後語」・「翁の文」に止まるは、この天才大阪人の爲めに惜しむべきである。湖南先生の謂はれる儒墨以下百家競起の由る所を専ら論じた支那哲學史論「說蔽」は恐

らく「翁の文」に次いで出版される筈だつたらうが、逝世早くして佚亡して終つたらしい。然し蘭阜李谿等の言が親しき者に倣する點はあつたにしろ、先生歿後に學術の後繼者無く、撰著が餘り流布しなかつたのは、所説が世人の理解を超えたものであつたからでもあるが、一に當時の學風の爲めだらう。殊に大阪は懷德書院の學術愈々行はれ、中井竹山出づるに及んで全盛を極めたのであつた。寶曆八年の懷德堂定約附記には異學者を招かざるを約して、「學問に流義は有間敷事に候へ共、近年子思孟子を譏り、三教一致と申抔、別に一流を立候異說時行申候、个様之學問は、縦ひ才德高名之人にても、主意相違いたし候へは、相頼候事可爲無用候」、などと異學の禁を示してゐるから、先生の學說も時の大坂人には知られなくなつたものと見える。却て他國で偶々先生の已刊本を見て喜んだ少しの人々か、之を仇敵視した僧侶とかが之を天下に廣布するに至らしめたのは皮肉な事である。幸ひ現代になつては謙齋先生は先生從學の懷德堂にて屢々表顯せられ、懷德堂の諸先生によつて傳記學術を闡明せられ、又吉田先生によつて「懷德」紙上にて先生の遺説富永仲基の論語徵駁遺稿本號が世に出づるとは、眞に奇縁と云ふより外は無い。